# プトレマイオス 2 世と ディオニュソスのテクニタイ

## ――アテナイオス第 5 巻 198 b を手がかりとして――

波　部　雄一郎

### は　じ　め　に

プトレマイオス 2 世フィラデルフォスは，プトレマイオス王朝の最盛期を築き上げた君主として評価されている。彼の治世（紀元前 285 年～246 年）の間に，東地中海沿岸地域一帯に王朝の勢力を及ぼし，この状況は紀元前 3 世紀の終わりまで維持されることとなる。同時に，彼はアレクサンドリアにおいて，多くの文化人を保護していたことでも有名である。そのため，この都市はプトレマイオス王朝の下，ギリシア文化の中心地として発展を遂げたのである。

カリクセイノスの第 5 巻に見られる，アレクサンドリアでの祭典行列は，当時プトレマイオス 2 世の権威がいかに絶大なものであったかを示す史料として引用されてきた(1)。この行列は，「明けの明星が空に現れる時刻に始まり，宵の明星が空に登る刻限に終わる（Ath. V，197 d.）」という大規模なものであり，ギリシア各地からの使節や参加者をもてなすために用意された宴会場を含め，カリクセイノスがこの行列にかけられた費用を記すほど，きらびやかなものであった。この行列の政治的意図や背景については別稿を予定しているので，ここでは概略を述べるにとどめておく。

ところで，カリクセイノスは，この行列にディオニュソスのテクニタイと呼ばれる集団が参加していたと記している(2)。この行列の中心部分を構成する，

ディオニュソスの行列が始まって程なく，彼らはディオニュソスの神官ピリスコスなる人物に従って観衆の前に登場している。ディオニュソスのテクニタイとは，ヘレニズム期において，各地の祭典に参加し，演劇の上演や音楽コンテストに参加した集団である。ギリシアの祭典では，必ず期間中に悲劇や喜劇などの演劇が上演されるのが習慣であり，なかでも古典期のアテナイで行われていた，大ディオニュシア祭での演劇が有名である。各地で創設された祭典は，大ディオニュシア祭を模倣したものが多かったが，当然演劇を演じる俳優などが必要であり，そのため専門の演劇集団に対する需要が拡大した，というのがディオニュソスのテクニタイが誕生した背景であろう。

もうひとつの背景として，紀元前 4 世紀のギリシア世界の政治状況があげられる。この時代は，ポリス内外で政治的対立が激しくなり，アウトサイダーが増加するという状況を生み出した。彼らには定住すべきポリスがなく，自らの持つ技能を頼りに，傭兵，奴隷，詩人として各地で生活の糧をも求めねばならなかったのである。このような社会的流動性の中で，各地の祭典の演劇や競技に参加するものが，やがて徒党を組んで行動するようになったという可能性も考えられる(3)。

ディオニュソスのテクニタイについては，従来悲劇を中心としたギリシア文学史に関連して語られるのみで包括的な研究は行われてこなかった(4)。というのも，ディオニュソスのテクニタイに対しては演劇集団というイメージが定着し，集団そのものについては着目されてこなかったからである。その上，ディオニュソスのテクニタイは，まとまったひとつの団体ではなく，複数の団体が各地で行動していたこともある。代表的なものを挙げれば，アテナイ，イストミア，イオニア=ヘレスポントス，ペルガモン，エジプト，キュプロス，シチリアのテクニタイの活動が知られている。そのため，各地のテクニタイについては，政治史，社会史との結びつきで論じられることが多かったが，史料の散在などの理由から，ヘレニズム時代におけるディオニュソスのテクニタイについて，全体的な見取り図を提示することは困難であったと思われる。

しかし，最近フランス人のル・ギャンによって，膨大な史料集を含む，ディ

オニュソスのテクニタイについての包括的な研究が発表された(5)。彼は各地のテクニタイを分析し，その構成員が，俳優だけでなく，劇作家や詩人，歌手やキタラ奏者など多種多様な技能を持った人間から構成されていたことに着目し，団体の構造を解明し，テクニタイを社会的背景の中で理解しようとしたのである。

このような研究状況を踏まえ，本稿ではプトレマイオス 2 世による祭典行列との関連から，エジプトにおけるテクニタイを扱う(6)。はじめにエジプト南部の都市プトレマイスから出土した碑文を中心に，エジプトにおけるテクニタイの特徴を考察し，カリクセイノスの記述に現れる，神官ピリスコスについて，考察を進めてゆく。テオクリトスの田園詩から，プトレマイオス王朝時代のエジプトでは，ディオニュソスのテクニタイが王朝の保護を受けていたことが明らかではあるが(7)，彼らの活動については史料の制約もあり，従来触れられることはほとんどなかった。また，テクニタイの保護については，プトレマイオス王朝がディオニュソスとの血統上のつながりを主張したという点から説明されはしても，王朝祭祀との関連について考察されることがなかった(8)。移動する都市とでも言うべき組織と特質を持った，ディオニュソスのテクニタイとヘレニズム君主との関係を見ることで，ヘレニズム王権，あるいは社会背景の一端を示したい。

## I. プトレマイスのテクニタイ

プトレマイオス王朝下のエジプトにおいて，最初にディオニュソスのテクニタイが史料上に現れるのは，カリクセイノスの記述を除くと，紀元前 3 世紀の中頃のものとされる，2 つのギリシア語碑文にその名が見られる。この 2 つの碑文は，エジプト南部テーベ近郊のギリシア都市プトレマイスで行われた決議の内容を示すものである(9)。

両方の碑文ともに顕彰を授けているのがディオニュソスのテクニタイであり，顕彰を受けている人物は，プトレマイス市の公職者ムサイオスの子ディオ

ニュシオス，もう一方の碑文では同じく都市の公職者であり，同時にプトレマイオス王朝の公職者でもあったプトレマイオスの子リュシマコスである(10)。彼らは，テクニタイに対する好意だけでなく，プトレマイオス王や神々に対する敬虔さの為に顕彰を受けているのである。この栄誉のしるしとして，両者は冠を授与されているが，むしろこの出来事が碑文という形で記録され，公共の場において広く宣言されたことの方が重要であったに違いない。

このような決議碑文は，ディオニュソス神殿の前に建立された。両方の碑文ともこの場所に建立されていることから，テクニタイの活動の拠点であったと推測されるが，プトレマイスにおけるディオニュソス信仰については不明である。アレクサンドリアをはじめ，プトレマイス以外にディオニュソス神殿の存在は知られず，プトマイスがエジプトにおけるディオニュソス信仰の中心となっていたのかもしれない。

また，プトレマイスのテクニタイは，ディオニュソスとテオイ・アデルフォイのテクニタイと名乗っている(11)。テオイ・アデルフォイとは，プトレマイオス 2 世と彼の王妃であるアルシノエ 2 世が，生前に神格化されたものであり，エジプトをはじめプトレマイオス王朝の支配下にある地域で礼拝が行なわれていた。テオクリトスは田園詩の中において，プトレマイオス 2 世とアルシノエ 2 世が，ディオニュソスのテクニタイのパトロンであったことを述べており，ディオニュソスとテオイ・アデルフォイのテクニタイという名称は，両者の関係を明確に示している。テクニタイの名称については，紀元前 2 世紀の後半にキュプロスから出土した碑文史料も重要な手がかりとなる。キュプロスのテクニタイは，ディオニュソスとテオイ・エウエルゲテスのテクニタイと名乗っており，テクニタイがプトレマイオス 8 世と密接なつながりを維持していたことを窺うことができる。プトレマイオス 8 世の場合，テクニタイとの接点を直接見出すことは不可能であるが，この王が一時期王家の内紛からキュプロスへと逃亡し，そこに滞在したという事実は，キュプロスのテクニタイの名称についての有力な手がかりとなろう(12)。

王家による保護を受けていた，プトレマイスのテクニタイであるが，どのよ

うに構成されていたのであろうか。上述のリュシマコス顕彰碑文には，彼に顕彰を授けたテクニタイの構成員の名前とその役割が記されている。そこから，このテクニタイは喜劇，悲劇専門の俳優とそれらの作家，合唱隊，竪琴弾き，賛歌詩人と歌手によって構成されていたことが明らかである(13)。演劇にたずさわるものだけでなく竪琴弾きや，歌手のような，音楽を専門とする人々が含まれていたことは，伝統的なギリシア祭典において催されていた音楽コンテストを想起させるものであり，彼らの活動の多様性を示している。

しかし，プトレマイスのテクニタイがエジプトにおける唯一の団体であると考えてよいのだろうか。この点を考える上で，2 つの碑文においてテクニタイが自らをどのように呼称しているのかが重要である。まず，プトレマイオス顕彰碑文におけるテクニタイは，Synodos という語で彼ら自身を表現している(14)。これに対し，リュシマコス顕彰碑文には何も記されていない(15)。各地のテクニタイによる顕彰碑文を見ると，通常は Koinon と記されている事が多く(16)，この場合も koinon であったと考えられる。この違いについては，従来では，Koinon がエジプト中のテクニタイを指し，Synodos はその中の地域的な集団を指すものと解釈されてきた。確かに，Koinon は，国家の連合をさす場合に用いられることもある。単独のテクニタイは Synodos で表され，Synodos の集団が Koinon であるという解釈は妥当であろう。プトレマイオス 2 世による祭典行列の場合では，テクニタイが複数であったと思われるし，同一の祭典に多数のテクニタイが参加する可能性も高い。

それでは，それぞれの Synodos はどのようなものであったのか。まず，エジプトにおける彼らの活動を考えねばならない。フレイザーは，アレクサンドリア市の法令が，塩税免除者の中に，ディオニュソスのテクニタイを含めていることや(17)，ポリュビオスが，プトレマイオス 5 世の宮廷にテクニタイが存在したと伝えていることから(18)，プトレマイスとは別に，アレクサンドリアのテクニタイが存在したと述べている(19)。

しかし，プトレマイオス 2 世の時代には，テオクリトス等の文学作品を除き，プトレマイス以外の地域でエジプトのテクニタイが活動したという事実

は，史料上見出すことができない。アレクサンドリア市の法令についても，アレクサンドリア市民のみに適用されたかどうか疑問である。法令の中には，エジプト南部のアポロノポリス近くのアルシノエというギリシア人居住地について触れられており(20)，法令そのものは，アレクサンドリア以外の土地でも効力を発揮したと思われる。また，ポリュビオスの伝承についても，年代がプトレマイオス 5 世の時代であるという点を考慮せねばなるまい。

ディオニュソスのテクニタイが活動していたプトレマイスのディオニュソス神殿が，彼らの拠点であったとする見解を述べたが，プトレマイス市に多くのテクニタイが存在し，この地を拠点に活動を行なっていたのではなかろうか。プトレマイスの状況については，それほどよく伝わっていないが，ストラボンによると，テーベ地域の中心であったという(21)。またプトレマイスは，プトレマイオス王朝がエジプトにおいて建設した唯一の都市であった。そのため王朝初期から多くのギリシア系住民が居住していたと思われ，古典期からのギリシア文化が根付いたのであろう。その一方で，都市の自治は，王朝の中央集権的政策によって阻害されたことは想像に難くない。上述のプトレマイオスのように，都市の公職者がプトレマイオス王朝の公職者を兼務していたことは，この都市の性格を端的に示しているのではなかろうか。また，この地では，都市の建設者として，プトレマイオス 1 世に対する供儀が行われていたという(22)。ディオニュソス神と同時にテオイ・アデルフォイの名を授けられたテクニタイがこの地に集まり，祭典など宗教活動の拠点としていたと考えることは，君主礼拝とのつながりから考えても不自然ではない。

## III. ディオニュソス神官ピリスコスとテクニタイ

プトレマイスの決議碑文から，エジプトでは複数のテクニタイが koinon としての団体を組織して活動していた可能性に言及したが，実際にテクニタイはどのように統括されていたのであろうか。この問題について考えるために，カリクセイノスによる祭典行列の記述に立ち戻ることとする。

ここで問題となるのは，ディオニュソスの行列において，テクニタイが，ディオニュソスの神官であるピリスコスという人物に従って行列に参加しているという点である。この記述を見る限り，ピリスコスがディオニュソスのテクニタイを統括していたと考えてよい。

ピリスコスについては，紀元後 10 世紀に編纂された『スダ』が伝えているのみである(23)。それによれば，ピリスコスはコルキュラ出身であり，プトレマイオス 2 世の宮廷に仕えた悲劇詩人であるという。また，彼はプトレマイオス 2 世の時代に，ディオニュソスの神官に任じられていたことも記されている。プトレマイオス 2 世との関連，ディオニュソス神官という共通点から，行列に参加していたピリスコスと，『スダ』におけるピリスコスが同一人物であったと断定してもよさそうである。

ピリスコスはアレクサンドリアの宮廷詩人の中でも，有名な人物であり，彼はプレイアスと呼称される作家集団に属していた(24)。この集団には，ピリスコス以外にアイトリアのアレクサンドロス，ビュザンティオンのホメロス，シュラクサのソシファネス，アレクサンドリア・トロアスのソシテウス，タルソスのディオニュシアデス，カルキスのリュコフォロンという著名な作家が属していたという。

彼らのアレクサンドリアにおける活動については，『スダ』に簡略に述べられているにすぎず，カルキスのリュコフィロンについてのみ，別の伝記史料から情報を得ることができる(25)。それによると，ここでプレイアスを構成する詩人として名前が挙がっているのは，リュコフォロン，ピリスコス，ホメロス，牧歌詩人テオクリトス，天象についての著作があるアラトス，ニカンドロス，アルゴナウティカの作者であるロドスのアポロニオス，そして名前は伝わっていないが，アンドロマコスという人物の息子で，ビュザンティオン出身の人物の 8 人である。つまり，ピリスコス，リュコフォロン，ホメロス以外は『スダ』の伝える詩人たちとは異なっているのである。このようなアレクサンドリアにおける著作家の伝記史料は，後代になってから編纂されたということもあり，伝承してゆく過程で多少の混乱が生じた可能性がある。本稿の目的

は，プレイアスの構成を解明することにはないので，詳しくは触れないが，プレイアスには，プトレマイオス 2 世時代にアレクサンドリアで名声を博していた詩人が所属し，創作活動を行なっていたことは確かである。ここに名前の挙がっているテオクリトスは，プトレマイオス 2 世の賛歌を著すなど，宮廷詩人として知られているし，アポロニオスも，2 代目の図書館長を務めるなど，王宮と密接な関係にあった詩人である(26)。プトレマイオス家が多くの文化人を集め，保護していたという事実と，テオクリトスやアポロニオスらの経歴を考えれば，プレイアスと王家の結びつきは容易に想像できるのではなかろうか。

次にピリスコスが務めていたとされる，ディオニュソスの神官であるが，史料上からは，プトレマイオス 2 世の時代には，そのような官職がおかれていたという事実は確認できない。フレイザーは，プトレマイオス王朝がディオニュソスを祖先として崇拝していたとして，ヘレニズム時代のアレクサンドリアでは，ディオニュソス信仰が盛んに行われていたと述べている(27)。しかし，紀元前 3 世紀の段階では，エジプトにおける信仰が組織的に行なわれていたとは考えにくい。パピルス史料により，プトレマイオス 4 世フィロパトル時代に，エジプト各地のディオニュソス密儀に関与する諸集団がアレクサンドリアに集められ，王朝の登録を受けたことはよく知られている(28)。ディオニュソスの密儀が王朝の統制を受ける以前の，プトレマイオス 2 世の時代には，ディオニュソス信仰は統一した教義を持っていなかったという点が明らかであるだけではなく，同時に体系的に組織されていなかったのではなかろうか。

ディオニュスの神官については，従来納得のいく説明がされてこなかったが，カリクセイノスの史料に注釈を加えたライスは，ギリシア本土の碑文を持ち出し，この神官がディオニュソスのテクニタイを束ねる存在であり，神官自身も俳優として演劇などに参加していたと解釈している(29)。ル・ギャンもこの箇所については，ライスの見解を支持しており(30)，カリクセイノスの伝えるディオニュソスの神官が，ディオニュソスのテクニタイを管轄する役割を果たしていたと考えるのが妥当であろう。ライスの注釈において注目すべき点

は，神官も俳優として団体の演劇活動に参加していたとする点である。この見解に従うならば，ピリスコスは神官としてテクニタイの活動に参加しており，つまり彼はテクニタイの一員であったということとなる。前章で述べた，プトレマイスからのテクニタイの構成を示す碑文には，悲劇作家も含まれており，こうした見方は受け入れられるかもしれない。

しかし，ディオニュソスの神官がテクニタイに所属する構成員であったという見解については，結論から述べると否定的な立場を取らざるを得ない。この問題について考えるために，ライスがディオニュソスの神官を説明するために用いた碑文を取り上げる。この碑文は，アテナイとアイトリアのテクニタイが，デルフォイで開催されていたソテリアといわれる祭典に参加したことを記した，紀元前 265 年頃から紀元前 255 年頃までの 10 年間に建立された，5 件の碑文である。ソテリア祭は，紀元前 3 世紀前半に創設された祭典であり，中でも演劇が有名で各地から多くの団体が参加したと思われる(31)。ここで扱う碑文も，ソテリア祭の中で演劇に関わったディオニュソスのテクニタイの構成員を記したものである。このうちアテナイのテクニタイは，ヘルミオネのアリスタルコスの息子でピュトクレスという人物が神官として記載されている(32)。一方で，アイトリアのテクニタイは，ザキュントスのアリストマコスの息子フィロニデスが神官として記されている(33)。彼らの名が神官として記された後に，テクニタイの構成員の名が列挙されている。しかし，これらの史料から構成員たちが俳優であったかどうかについては明記されていない。また，ピュトクレス，フィロニデス両名についても神官として記載されているだけであり，彼らを俳優と解釈するライスの見解には疑問が生じる。

確かに，テクニタイによって多少の差異は考慮されねばならないが，地理的な面からも，ピリスコスがテクニタイに属したという見解は否定できる。前章で述べたように，紀元前 3 世紀前半には，エジプトにおけるディオニュソスのテクニタイは，プトレマイスを拠点としていたので，ピリスコスがアレクサンドリアを拠点として活動していたことからも，彼がテクニタイの一員であったと考えるのは無理が生じる。むしろ，ピリスコス自身が，プトレマイオス王

朝の祭典において，何らかの役割を果たしていたために，ディオニュソスのテクニタイを統括する立場にあったと考えるのが無難であろう(34)。

ピリスコス自身がディオニュソスの神官として，行列に加わったことは間違いない。また，ディオニュソスの神官というものが，宗教的な職であったというよりも，テクニタイにおける官職としての特徴を持っていたといってよい。しかし，上述の理由から，ピリスコスをテクニタイの一員とすることは，飛躍しすぎであるが，このことがピリスコスとテクニタイとの関係を否定するものではない。すでに述べたように，ギリシアの祭典では演劇が上演され，ヘレニズム時代においても，変わることのない習慣であった。そのため，劇作家はテクニタイにとっては不可欠な存在であったに違いない。一方で，劇作家たちは，自分たちが創作した演劇が祭典の場で，上演され，あるいは賛歌が歌われるということは非常に名誉なことであった。祭典が，コンテストの性格を持つ場合，そこで優勝するということは，作家の名前を広める最も効果的な手段であったと思われる。このように祭典の芸術的側面から考えると，両者の密接な関係を推測するのは容易ではなかろうか。

## お　わ　り　に

以上の議論をまとめると，紀元前 3 世紀のエジプトにおけるディオニュソスのテクニタイは，組織的な集団ではなかったが，プトレマイスという地域を拠点に，諸集団が集まり活動していた。彼らは，ディオニュソスの神官のもとに統率され，各地で祭典に参加したと考えられる。ピリスコスの事例から，ディオニュソスの神官とは，宮廷詩人など，王室に近い存在であり，テクニタイには所属していないが，悲劇詩人や賛歌詩人など，祭典で行われる演劇や芸術競技に関わる人物が務めていた。プトレマイオス王朝は，大図書館やムセイオンの建設によって，ギリシア文化もしくはそれを担う芸術家たちを保護してきたが，ディオニュソスのテクニタイも，同様の保護が与えられてきたのである。テオクリトスは，田園詩においてプトレマイオス 2 世がディオニュソス

のテクニタイに保護を与え，それに対してテクニタイが王のために技芸にいそしむ様子を述べているが，こうした文学作品からの解釈は，宮廷の様子をうかがうものとして興味深い。

祭典は，詩人とテクニタイだけではなく，彼ら両者と王との間をつなげる媒介であったとみてよい。プトレマイオス王朝は，エジプトにおいて数多くの祭典を創設したが，その多くはプトレマイオス 2 世に帰せられる(35)。エジプトにはギリシア各地からの植民者が集ってきたという背景を持っており，紀元前 3 世紀の間を通して植民者の流入は続いていた(36)。彼らを支配する上で，彼らの共通の伝統であるギリシア古来の祭典が支配装置として利用されたのではなかろうか。ディオニュソスのテクニタイは，祭典に不可欠であるという意味からも，王朝の特別な庇護を受けるに至ったと思われる。

本稿では年代をプトレマイオス 2 世の時代に限定したが，王朝がディオニュソスという存在を利用する過程を考える上では，それ以降のテクニタイについても考えなければならない。エジプトのテクニタイが，エジプト以外の土地での活動については，王朝とテクニタイの関係を考える上でも重要であるかもしれない。また，ポリュビオスによると，紀元前 3 世紀の終わり頃にテクニタイは王宮の中に見出すことができる。さらに紀元前 2 世紀にあらわれる，キュプロスのテクニタイとの関係など，重要な問題点は今後の課題として取り組むこととしたい(37)。

プトレマイオス王朝は，文化人を保護することによって，ギリシア世界に対する威信の一つと考えたが，王朝の保護を受けた文化人は王家を賞賛する作品を残し，結果として王朝のプロパガンダが生み出されたといってよい。例えば，テオクリトスは彼の田園詩第 15 歌をプトレマイオス 2 世への賛美にあて，王の功績を神々にも匹敵するかのごとく賛美している(38)。こうした作家の作品を読み解くことによって，ヘレニズム王権の本質を見いだすことができるかもしれないが，別の機会に譲ることとしたい

註

(1) Ath. V, 197 d−203 b. カリクセイノスは紀元前 2 世紀の著述家とされるが，彼の行列に関する記述は，アテナイオス第 5 巻に抜粋される形で現存している。カリクセイノスと行列の年代については，拙稿「プトレマイオス 2 世による祭典行列の年代について――エジプトにおけるディオニュソスの技芸人を中心に――」『関学西洋史論集』第 26 号，2003 年，29−42 頁。

(2) Ath. V, 198 b−c.

(3) マケクニー・P，向山　宏訳『都市国家のアウトサイダー――ポリスから古代帝国へ――』1995 年，177−216 頁。

(4) 例えば，Sifakis, G. M., *Studies in the History of Hellenistic Drama*, London, 1967 ; Pickard-Cambridge, A., *The Dramatic Festivals of Athens*, 2nd. ed. by Gould J. and Lewis D., Oxford, 1988.

(5) Le Guen, B., *Les associations de Technites dionysiaque à l'époque hellénistique*, 2 tomes, Nancy, 2001.

(6) エジプトにおけるディオニュソスのテクニタイについては, Plaumann, G., *Ptolemais in Oberägypten : ein Beitrag zur Geschichte des Hellenismus in Ägypten*, Leipzig, 1910, 60−65 ; San Nicolo, M., *Ägyptisches Vereinswesen zur Zeit der Ptolemäer und Römer*, 2 Bde., München, 1913 ; Dunand, F., 'Les associations dionysiaques au service du pouvoir Lagide（IIIe s. av. J. -C.）', *L'association dionysiaque dans les sociétés anciennes*, Rome, 1986, 85−103.

(7) Theoc. *Idlly*. XVII, 113−116.

(8) Fraser, P. M., *Ptolemaic Alexandria*, Oxford, 1972, I, 203, 619.

(9) 拙稿前掲論文 33−36 頁。

(10) *OGIS* 50（ムサイオス）；*OGIS* 51（リュシマコス）.

(11) *OGIS* 50. 2 ; *OGIS* 51. 1−2.

(12) プトレマイオス 8 世とキュプロスにおけるテクニタイについては，Le Guen, *op. cit*., I, 301−315. これに対し，アネツィリは，キュプロスは以前プトレマイオス 8 世と敵対関係にあったプトレマイオス 6 世の影響下にあったため，キュプロス支配を強化するために，テクニタイが送られた可能性を指摘する。Aneziri, S., 'Zwischen Musen und Hof : Die Dionysischen Techniten auf Zypern', *ZPE* 104, 1994, 187−188. また，プトレマイオス 8 世時代の内乱については，Hölbl, G., *A History of Ptolemaic Empire*, New York, 2000（translated by Saavedra, T., *Geschichte des Ptolemaërreiches*, Darmstadt, 1994），146−151, 197−204 ; Huss, W., *Ägypten in der hellenistischer Zeit 332−30 v. Chr*., München, 2001, 627−636.

(13) *OGIS* 51. 29−79.

(14) *OGIS* 50. 3.

(15) San Nicolo, *op. cit*., 49−50.

(16) Pickard-Cambridge, A., *op. cit*., 281−297.

(17) P. Hal. I. 260−265. 史料の年代については，拙稿前掲論文，34−35 頁。

(18) Polb. XVI, 21. 8.

(19) Fraser, *op. cit*., I., 619 ; II, 870 n. 1.

(20) *P. Hal*. 179.

(21) Strab. XVII, 401.

(22) Habicht, C., *Gottmenschentum und griechische Städte*, 2. Aufl., München, 1970, 123.

(23) *Sudae Lexicon*. s. v. Philiscos.（Adler, A. ed., *Svidae Lexikon*, 5 vols, 1967−1971, Stuttgart.）

(24) Van der Kolf, M. C., 'Pleias', *RE* 41, 1951, 191−192. 彼らの伝記については，『スダ』に見られる各自の項目を参照。

(25) リュコフロンについては，12 世紀のツェツェスによる伝記が伝承する。Fraser, *op. cit*., II, 649 : van der Kolf, *op. cit*., 191.

(26) プトレマイオス 2 世時代の宮廷詩人については，Weber, G., *Dichtung und höfische Gesellschaft : Die Rezeption von Zeitgeschichte am Hof der ersten drei Ptolemäer*, Stuttgart, 1993.

(27) Fraser, *op. cit*., I, 201−203.

(28) *BGU* 1211 ; Tondriou, J. L. 'Le décret dionysiaque de Philopator（B. G. U., 1211）', *Agyptus* 27, 1946, 84−95. トンドリューは，プトレマイオス 4 世の時代に，ディオニュソスの祭祀に対して国家統制が行なわれたとしている。

(29) Rice, E. E., *The Grand Procession of PtolemyII Philadelphus*, London, 1983, 53.

(30) Le Guen, *op. cit*., I, 346−347.

(31) ソテリア祭については，Sifakis, *op. cit*., 63−85. この祭典は，紀元前 3 世紀のはじめに，ギリシアへと侵入したガラティア人の撃退を記念して創設され，その後パンヘレニックの祭典に発展した。

(32) ピュトクレスについては，*SEG* I. 187 A. 13−14 ; *SEG* II. 339. 6−7 ; Le Guen, *op. cit*., I, 24 C. 9.

(33) フィロニデスについては，*Syll*$^{3}$. 424. 2−3 ; *Syll*$^{2}$. 404. 1−2.

(34) Polland A., 'Technitai', *RE* 5, 1934, 2526−2533. ポランドも神官がテクニタイを統括するという立場にあったと指摘している。

(35) Perpillou-Thomasu, F., *Fêtes d'Égypte ptolémaïque et romaine d'après la documentation Papyrologique greque*, Leuven, 1993, 151−172.

(36) Lewis, N., *Greeks in Ptolemaic Egypt*, Oxford, 1986, 8−36.

(37) Polb. XVI, 21. 8 ; Aneziri, S., *Die Vereine der dionysischen Techniten im Kontext der hellenistischen Gesellschaft : Untersuchungen zur Geschichte, Organisation und Wirkung der hellenisti-schen Technitenvereine*, Stuttgart, 2003.

(38) Theoc. *Idlly*. XV.

——大学院文学研究科博士課程後期課程——